

授業評価・授業研究報告

美術教育講座・福井一真

令和2年度3年次後学期（水曜日3限）の教職科目 B 工芸科教育法 2 についての授業評価・授業研究報告を行う。担当者：福井一真／登録学生数 2 名。

1 授業の目的および概要について

本授業は主に工芸科教育法 1 で学修した内容を基盤として、工芸教育における学習内容を理解した上で模擬授業を行い、工芸の授業を構想し設計する力や、授業分析の能力を培うことを目的としている。授業の到達目標は下記の通りである。

- 1) 生徒の実態を視野にいれた授業設計ができる。
- 2) 学習指導案の構成を理解し、具体的な授業を想定した授業設計と学習指導案を作成することができる。
- 3) 模擬授業の実施と振り返りを通して、授業改善の視点を身につけている。

2 授業を行う上での工夫

工芸科は美術科とは異なる題材の構築が求められるということや、素材や道具の取り扱いが多岐に渡るため、講義は題材研究を主軸にすえている。今回は、学生の希望を取り入れながら、美術科ではなかなか取り扱わない「革素材」と「ガラス素材」を題材研究として取り入れた。また、題材への理解を深める手立てとして年間指導計画の作成と発表を模擬授業の代わりに課すことにした。

3 授業アンケートの結果

授業アンケート（令和元年1月27日実施）は、2名の回答を得ることができた。

3-1 授業全体について

【総合的にこの授業は満足だった】という設問に対して、「まあまああてはまる」「とてもあてはまる」各1名、【全体的にこの授業を真剣に受けた。】という設問に対しては、「とてもあてはまる」2名という回答を得た。この結果から、授業全体を通して、学生が積極的に授業に取り組んでいたと判断することができる。

【本授業の内容は教育実習や今後、教師になってからも役に立つ】という設問では「とてもあてはまる」

2名という回答を得た。さらに、【本授業を受講する前と受講した後で、工芸科に対する印象（考え方が変化した】という設問では、「とてもあてはまる」2名という結果を得た。この結果から、本授業の到達目標を概ね達成できたものと判断できるのではないだろうか。

3-2 地域社会を核とした教育と研究のつながり

近年では、子どもの造形プロセスによくみられる「つくりながら考える」造形プロセスについての研究を行っている。本プロセスはイメージを前提とした活動ではなく、素材や道具などのかかわりの中から、イメージが着想し、変容していくことを前提としたものである。工芸科の題材でもこうした造形プロセスは題材を設定する上で重要な役割を担う。工芸科教育法 1 において、こうしたプロセスを実際に体験しているので、その体験を基盤として、これまで取り扱ったことのない革素材やガラス素材という分野にも言及することとした。革は古来より生活を支える上で貴重な素材であることは言うまでもない。ガラス棒を溶かして行うトンボ玉制作。どちらも身近にあるが、題材として取り扱うことが少ない。こうした経験を積み重ねることで、地域に根ざした題材の提案を可能とするのではないかと考えている。

4 成果と課題

【本授業の改善点】についての回答は、特に得られなかったが、【本授業の良いと思う点】については以下のような記述がみられた。

- ・自分たちの興味ある素材で研究をさせていただいたこともあって、やる気を十分に持って課題に取り組むことができた。
- ・自分が経験することで、教員になった時にいかせそうだと思います。

これらの意見から、本授業の目的のひとつでもある、工芸科の学習内容の理解や具体的な授業を想定するなどの目標が達成されたと考えられる。とはいえ、受講生数が少ない講義になるので、模擬授業等の実施の工夫を今後も検討する必要があるだろう。